

# AT 313 「主人公の逃走を援助する娘」の 民族学的解釈

——グリム兄弟『子どもと家庭のメルヒェン集』  
113 番「王様の二人の子ども」などをてがかりに

横 山 ゆ か

## 1 はじめに

グリム兄弟の『子どもと家庭のメルヒェン集』（以下、KHM と略記）113 番「王様の二人の子ども」<sup>1)</sup> は、アールネ／トンブソンの『昔話の型』（以下、AT と略記）の 313 番「主人公の逃走を援助する娘」The Girl as Helper in the Hero's Flight<sup>2)</sup> に分類されており、これまでにヨーロッパ、アジア、アフリカ、南北アメリカなど様々な地域で採録されている<sup>3)</sup>。はじめに KHM 113 を具体例に、このメルヒェンの梗概を示す。

昔、王が小さな王子を授かった。その子には 16 歳になったら鹿に殺されるという星が出ていた。王子が 16 歳になったある日、狩りをしてると大男にさらわれ、大男の王の城へ連れていかれる。王子は、大男の王から三人の娘の寝ずの番をするよう命じられ、それができれば娘を嫁にやると告げられる。主人公は大男の王の娘の援助でこの難題をやり遂げる。しかし王はさらに三つの難題（一日で森の木を伐採する、一日で池のかえ掘りをすませる、山の茨を全て刈って大きな城を建てるという難題）を王子に課す。末の娘が小人に命じて、王子が寝ている間に難題を代行させる。難題を成し遂げたにもかかわらず王は結婚を承諾してくれないので、王子は娘を連れて逃げる。逃走の際、娘の魔法で二人は様々なものに変身し、王と王妃から逃れる。連れ戻すことができないと悟った王妃は胡桃三つを娘にやり、自分の国へ帰る。

王子は娘を迎えに来る約束をして先に一人で城へ帰る。しかし王子の母からキスを受けると、王子は花嫁のことを忘れてしまう。王子は新し

い花嫁を見つけて式を挙げようとする。忘れられた娘が母からもらった胡桃を一つ開けるときれいな衣装が入っていたのでそれを着て式へ出かける。花嫁が娘の衣装を欲したので、娘はその代りに一晚王子の部屋の外で寝かせてもらう。部屋の外で娘はこれまでにあったことを話すが、王子は寝ている。同様のことがもう一晚続き、今度は王子が目を覚ましていたので全てを思い出す。娘は三つ目の胡桃に入っていた衣装を着て、王子と結婚式を挙げる。

ドイツのパーダーボルン地方に由来するこのメルヒェンはルドヴィーネ・フォン・ハクストハウゼンを通してグリムに送られてきたメルヒェンで<sup>4)</sup>、初版では第2巻27番の番号が付されており、第2版からは113番となっている。KHM 113はAT 313の構成要素である6項目（I 主人公が人食い鬼の手中に落ちいる。II 人食い鬼の課題。III 逃走。IV 忘れられた花嫁。V 魔法による忘却からの脱却。VI 本来の花嫁が選ばれる。）をすべて含むサブタイプAT 313Cに相当する。

AT 313では、敵対者として主にデーモン、悪魔、巨人、魔女などが登場するのだが、このメルヒェンの不可解な点は、主人公がこれら敵対者の娘と結婚する点である。さらに主人公は自力で課題を解決することができず、娘の力で課題を成し遂げ、そして主人公は娘が助けてくれたにもかかわらず一度は娘のことを忘れてしまう。また女性が主人公であるAT 313はほとんど存在せず、主人公はたいていの場合が男性である。そもそもなぜ敵対者の娘は主人公を助けるのか。娘はいったい何者なのだろうか。

本稿では、先行研究を確認した後、敵対者の娘と豊穡の女神との共通点を明らかにし、さらに主人公に課される難題の内容や解決方法を古代の王=呪術師やシャーマンの巫儀と比較することで、このメルヒェンの起源が巫術王と女神の聖婚儀礼にあることを証明する。

## 2 AT 313「主人公の逃走を援助する娘」の先行研究

AT 313に関するこれまでの研究は2つに大別される。1つは「呪的逃走」のモチーフに焦点を当てた研究であり、もう1つはイアソンとメディアの物語（アルゴー船伝説）との比較研究である。

前者の代表的な研究として、アールネの『呪的逃走』<sup>5)</sup>が挙げられる。

この著書でアールネは43の民族における760話の呪的逃走譚を「障害型」と「変身型」に分類し、その発生地、発生時期、伝播経路を解明しようと試みた。一方、呪的逃走譚の起源を究明しようとしたウラジーミル・プロップは「変身型」の呪的逃走のモチーフは、ヨーロッパ以外では6例しか発見されておらず、後世に発生したものと考えた<sup>6)</sup>。そして「逃走は、他界から物をとってくるという盗みの結果だと仮定するほかない<sup>7)</sup>」と、呪的逃走の起源を世界の創造者による呪的手段の盗みとしている。その他、呪的逃走に関連する研究として、呪的逃走は話型ではなく、モチーフだと主張したクラウス・アントニ氏の研究<sup>8)</sup>や逃走の際に背後に投げられる呪物と追跡者を世界各地の死者崇拝と結びつけ、呪的逃走のモチーフは本来、狼や熊などの動物霊が彼岸の入口から死者の国まで死者を追いかけるという観念が、のちにメルヒェンや伝説の中で動物霊が黄泉の国を訪れた生者の帰還を妨げる話に変化したと主張するマリー・パンクリティウスの民族学的研究<sup>9)</sup>、ヤーコプ・グリムや柳田国男の呪的逃走論を紹介した高木昌史氏による日独の呪的逃走譚比較研究<sup>10)</sup>などが挙げられる。

AT 313とアルゴ船伝説の比較研究では、アンドルー・ラングが『習俗と神話』<sup>11)</sup>で両者の類似性を指摘してから、その関連性をめぐって様々な議論がなされてきた。カール・モイリは「主人公を援助する娘」のモチーフ<sup>12)</sup>がAT 513「不思議な援助者」のメルヒェンに入り込んでいると考え<sup>13)</sup>、スヴェン・リリエブラッドはアルゴ船物語はAT 513「不思議な援助者」とAT 313「主人公を援助する娘」、AT 531「忠実なフェルディナンド」の3つのメルヒェンに由来すると考えた<sup>14)</sup>。これに対してヤン・デ・フリースはAT 313とアルゴ船伝説の関連性のある程度は認めながらもリリエブラッドの説を全面的に否定した<sup>15)</sup>。これらの研究では、イアソンとメデアの物語とAT 313のメルヒェンの構造が同一であること、そしてモチーフの類似点と相違点を明らかにした点では評価されるが、このメルヒェンあるいは神話の起源を解明するまでには至らなかった。

これに対して上記の比較研究を踏まえて民族学的な視点からこのメルヒェンの起源を解明しようとしたのがハイノ・ゲールツである。パンクリティウスの研究が呪的逃走における呪物と追跡者にのみ焦点が当てられているのに対して、ゲールツは論文「二つのメルヒェンの年代規定に

ついて]<sup>16)</sup>の中で「主人公を援助する娘」のメルヒェンタイプとイアソンとメディアの物語やオオナムチの根の国訪問譚などを引き合いに出し、敵対者や主人公を援助する娘、およびイアソンとメディアにおける逃走などパンクリティウスが触れなかった物語の要素にも注目した。そして、このメルヒェンはシャーマンの魂の旅あるいは族外婚が反映されたものであり、AT 313のメルヒェンは太古の物語形式で、神話の形式よりも古いものであるという結論に至った<sup>17)</sup>。ハイノはこの論文でAT 313における構成要素を取りあげて論じてはいるものの、メルヒェンの具体例を紹介し、細部にわたって分析しているわけではない。そこで本稿では敵対者の娘と主人公の行動に焦点を当てながらAT 313の類話を分析することで、このメルヒェンの民族学的・歴史的背景を探っていくことにする。なお本稿では、AT 313の中でも変身型の「呪的逃走」や「忘れられた花嫁」のモチーフがないものも含め、課題を含む話を中心に分析を行う。

### 3 援助する乙女=鳩の乙女

#### (1) 鳥の種類

AT 313の導入部は多岐にわたっている<sup>18)</sup>。例えば、主人公の父親がデーモンや巨人など敵対者に息子を渡す約束をする、または主人公自身が賭け事に負けたため自分を敵対者に渡すことを約束する、KHM 113のように主人公が誘拐される、あるいは鳥と四足獣との闘い(AT 222)の後、傷ついた鷺が男に介抱され、その後「禁じられた箱」<sup>19)</sup>のモチーフが続くもの、または「白鳥の乙女」のモチーフなどである。課題型の呪的逃走譚全てに「白鳥の乙女」のモチーフが現れているわけではないが、かなりの広がりを見せているとアールネが述べている通り<sup>20)</sup>、AT 313のメルヒェンと「白鳥の乙女」のモチーフに密接な関係があると考えられる。そこで以下、このモチーフを中心に分析を行う。なお本稿で扱ったAT313の課題型の類話28話の出典は論文末尾に掲示した。

主人公が白鳥の乙女たちが湖で水浴びしているのを目撃し、そのうちの一人から白鳥の羽衣を奪い、娘は結婚を条件に羽衣を返してもらい、

彼を父親の家へ連れていくというのがAT 313における「白鳥の乙女」のモチーフである。アールネは、課題を含む呪的逃走譚の中で、「白鳥の乙女」のモチーフを伴う話が世界各地に広まっていることを確認したが<sup>21)</sup>、鳥の種類や娘の故郷（異界の場所）については言及していない。そこでAT 313の課題型の類話28話のうち「白鳥の乙女」の導入部を持つ話および「援助する娘」が鳥の類であることを暗示させる話を表にまとめると、計14話のうち鳩が6話、鴨が2話、山羊・猫・鷺・魚が各1話ずつに登場し、種類不明のものが3話に登場し、白鳥は一度も確認できなかった。「援助する娘」を考察する上で、これらの動物が重要な要素であるように思われる。そこで「白鳥の乙女」のモチーフの起源を確認した後に、各動物の表象について確認する。

## (2) 「白鳥の乙女」

「白鳥の乙女」のモチーフを含む代表的な話型の1つにAT 400「消えた妻を探し求める夫—白鳥の乙女」The Swan Maidenがある。AT 400の「白鳥の乙女」とAT 313のそれとの違いは、AT 400では、主人公に羽衣を奪われた直後に、白鳥の乙女は主人公と結婚をし、たいいてい場合は子供を産む。その後、羽衣を発見した妻が天に帰るのだが、AT 313では羽衣を返してもらう条件に結婚の約束をし、その直後に娘は父親のもとへ帰る。つまりAT 313ではほとんどの場合、娘の父親に会う前に結婚生活は営まれてはおらず、また物語を通して主人公との間に子供が生まれたという描写もない。AT 400の話型において重要な点は妻の探索および難題解決の他、白鳥の乙女との暮らしと子供を得るこ

表1 AT313（課題型）における援助する娘が変身する鳥（動物）の種類

鳥（動物）	総数	テキスト
鳩	6	ドイツ③ <sup>22)</sup> 、ドイツ④ <sup>23)</sup> 、イタリア②、ロシア②、シベリア、トルコ
鴨	2	アイルランド、ロシア①
鷺	1	ロシア④
山羊	1	ドイツ③
猫	1	スウェーデン
魚	1	サモア
？（鳥を暗示させる）	3	ドイツ②（KHM 193）、スペイン①、アルゼンチン

とであり、AT 313 では娘が主人公を助けて難題を解決し、地上に帰還することに重点が置かれているようだ。

ホリ・ブリヤート族やカザフ人、満州人、オイラト人などのモンゴル系民族やナシ族、アイヌ民族の間では、白鳥の乙女が一族の始祖となるAT 400 に相当する神話が伝承されている<sup>24)</sup>。初期の氏族社会の多くは、白鳥の乙女など超自然の存在との結婚にその起源を求めることができるのだが、これまでの研究でも「白鳥の乙女」の物語は、トーテムミズムの宗教形態にその起源があるとされてきた<sup>25)</sup>。

一方、AT 313 では難題の解決と地上への帰還が話の中心になっているわけだが、異界の者の援助や鳥の衣、他界からの帰還はシャマニズムを強く喚起させる。『メルヒェン百科事典』によると、AT 400「白鳥の乙女」の分布地域は北ユーラシアのシャマニズム圏と一致しているようだが<sup>26)</sup>、AT 400「白鳥の乙女」に限らず、AT 313 にもシャマニズムの要素が散見される。AT 313 におけるシャマニズム的要素については後で詳しく論じることにし、ここでは、「白鳥の乙女」の背景にはトーテムミズムの観念およびシャマニズムとの関係があることを指摘するにとどめる。

### (3) 鳩・鴨・鷺・山羊・猫・魚のメタファー

先に確認した通り、AT 313 の援助する娘は鳩や鴨、鷺、猫、魚などの乙女であった。これらの動物は神話や伝承の中でどのような意味をもつのだろうか。

鳥は旧石器時代から多くの文化で女神の顕現を表す最高の表象であると考えられており、チェコのドルニ・ヴェストニツェやギリシアのテッサリア地方、クレタ島でも鳥女神と思われる考古学的な遺物が発掘されている。この女神の表象は約2万年前かそれ以上も前に、ピレネー山脈からシベリアのバイカル湖へと続く広大な土地に出現し、「鳥女神」はその後、様々な文明の女神に継承されていく<sup>27)</sup>。

とりわけ鳩は愛と豊穰の女神イナンナ／イシュタル、アスタルテ、アフロディテ、ヴィーナスのシンボルとされている。特にミノア文化では鳩は女神の中心的表象であり続け、粘土で作られたその模型が奉納物として多くの洞窟から発見されている<sup>28)</sup>。古代ローマ人たちはアフロディテのことをヴィーナス・コロンバ（コロンバはハトの意）と呼び、彼女

の地下墓地、霊廟、共同墓地は「鳩小屋」と呼ばれていた<sup>29)</sup>。さらに鳩は「王権を授ける鳥」*regium augurium*と考えられていた<sup>30)</sup>。プレリアデスの「7人の姉妹」のギリシア名は「鳩の群れ」を意味し、彼女たちはアフロディテの娘、すなわちアフロディテの放つ七条の「光線」とされており、ヘロドトスによると、鳩たちと言われていた七人の巫女が、ドドナ、エピルス、テバン・アモンの神託所を創建したという<sup>31)</sup>。ドイツのAT 313の類話「七羽の鳩」でも、援助する娘は鳩の乙女で7人姉妹だが、彼女たちはアフロディテの娘すなわち巫女であるプレリアデスの7人の姉妹と起源を同じくするのかもしれない。

鴨も鳩と同様、古代ギリシア・ローマの時代はアフロディテの聖鳥とされ、同時にエロティックの象徴とされていた<sup>32)</sup>。ギリシアのテラコッタの塑像には鴨に似た水鳥が知られており、母なる神およびオデュッセウスの妻であるペネロペ (*penelops*=鴨) との関係も指摘されている<sup>33)</sup>。さらに鴨は水、空気、大地の3つのエレメントと結びついて、母なる女神の表象で<sup>34)</sup>、鴨の衣は泳ぐため、飛ぶための呪物としてしばしばとり上げられる<sup>35)</sup>。また、鴨はシャマニズムとも関係があり、シベリア（北およびトランスバイカルのトゥングース）では鴨の形あるいは馴鹿の形をした衣装が圧倒的であるという<sup>36)</sup>。あるシャーマンは守護霊の力を借りなくては冥界から帰ってこないのだが、帰りの旅のうち最も難しい部分がコーリー（長い頸をした鳥）の背中に乗って乗り越えることだという<sup>37)</sup>。これはAT 313における呪的逃走の際に、鴨に変身して逃げ切る主人公の姿を想起させる。

魚もまた豊穰、豊富、生命を表し、多産で、性欲と密接に関係している。アフロディテは鳩、鴨と同様、魚もシンボルに持ち、またイシュタルのシンボルの1つは「魚のいる家」、つまり豊穰に満ちた家である<sup>38)</sup>。アスタルテも魚と関連があり、彼女はイクテュス（ギリシア語で「魚」の意）を産んだと言われている<sup>39)</sup>。魚女神の起源は非常に古く、ユーゴスラヴィアの遺跡で発見された紀元前5800年頃の彫刻物は、一部は人間、一部は魚の姿をしている<sup>40)</sup>。

AT 313のドイツとスウェーデンの類話では援助する娘は山羊や猫にも変身している。雌山羊は鳩や、鴨、魚と同様、女性的生殖力や豊穰を表わしている<sup>41)</sup>。プラトン派の哲学は包括的な愛の可能性を鼓吹する「天上のアフロディテ」と地上的種類の情愛を具現した「地上のアフロ

ディテ」との区別を提起したが、後者の表出形態には、神殿売春の儀礼も含まれており、その際のアフロディテは多情な性質を持つ山羊の表象でもあった<sup>42)</sup>。またテセウスがアポロンの命令に従って海岸で女神に雌山羊を犠牲に捧げると、この山羊が雄山羊に変身し、それ以来アフロディテは雄山羊に乗った姿で描かれたという<sup>43)</sup>。北欧神話の豊穡の女神フレイヤも、ヒュンドラから「ヘイズルーン（雄山羊）が雌山羊と走るみたいに、情欲婦のお前は夜に外を跳ね回る」とその好色な性格を咎められている<sup>44)</sup>。一方、猫はメルヒェンにおいて魔女が変身したのとしてしばしば登場するが、そのような考えも古代の女神崇拝に遡る。猫はギリシア・ローマの女神アルテミス／ディアナとエジプトの月と豊穡と出産の女神バステトのシンボルであり、北欧神話の豊穡の女神フレイヤもまた猫が牽く乗り物に乗っている。またフレイヤは「白鳥の乙女」と同様、鷹の衣を所有している<sup>45)</sup>。

以上、「援助する娘」が変身する動物のシンボルについて確認したが、鳩、鴨、魚は豊穡の女神であるアフロディテおよびそれと同系統の女神であるイナンナ／イシュタル、アスタルテのシンボルであり、また山羊は豊穡の女神アフロディテやフレイヤの多情を表していること、猫も豊穡の女神フレイヤの聖獣で、いずれも豊穡と関わりのある動物であることが分かった。さらに先に確認した表で最も頻繁に現れる鳩と鴨はシャマニズムおよび巫女との関係があり、「援助する娘」が豊穡の女神あるいはそれにまつわる巫女とのつながりが伺われる。

#### (4) 「援助する娘」の住処

「援助する娘」=鳩の乙女=鳥女神であるならば、当然、その住処は天上界だと考えられる。しかしながら、調査した類話の中で「援助する娘」の住処としての天上界は1つも確認できなかった。主人公が赴く場所、すなわち、「援助する娘」が住む異界の種類をまとめると表2のようになる。

表2が示している通り、大地と天上界を結びつける山を除いて、森、地下世界、海底、井戸の中などは大地を軸としている場所である。多くの文化で山や丘は大地である女神の表象および冥界であり、「母」の子宮でもあった。ラテン語の *mundus* は「大地」と「子宮」を意味し、同様にサンスクリット語で聖所を表す語は *garbha-grha* で、「子宮」を意



表2 「援助する娘」の住処

	異界の場所	テキスト
山	ガラス山	ドイツ② (KHM 193)
	ブロックス山	ドイツ③
	緑の山	フランス
	山の麓	トルコ
森	森の中	ドイツ④
	森の中	ドイツ⑤
	森の中	イタリア①
	森の中の悪魔の城	ハンガリー
地下世界	地下世界	オーストリア
	地下世界	チェコ・スロヴァキア
	地下世界の清教徒の地	フィリピン
海	海の底	スウェーデン
	海の彼方の神の国	サモア
川	川の中 (地下世界)	ロシア②
井戸	井戸	ロシア③
その他	悪魔の国	ルーマニア
	悪魔の家	アルゼンチン
	異郷	ロシア①
	竜王の国	ロシア④
	大男の国	ドイツ① (KHM 113)
	遠くの町	イタリア②
	遠い場所	アイルランド
	遠い地	シベリア
	行きて帰らざる城	スペイン①
	行きて帰らざる城	スペイン②
	ユダヤ人の家	スペイン④
	不明	イタリア③
	不明	スペイン③

味したという<sup>46)</sup>。メソポタミアの神殿ジグラットは山をモデルにして造られていたが、そこは神が再生する大地の子宮でもあり、天界と大地の聖婚が「母神」である女神官と王＝配偶者である神官との間で執り行われた<sup>47)</sup>。

森もまた古代の宗教では子宮のシンボルであり、聖所のある場所、聖

婚や加入礼が行われる場であった<sup>48)</sup>。「聖なる森」を指す共通の印欧語は、ネミ Nemi であり、このことは、「聖なる森」がネメシス、ディアナ・ネモレンシスといった「森の女神」に捧げられていたことを示している<sup>49)</sup>。

海底や川の底を含め、地下界は大地と最もつながりの強い場所であり、豊穡は地下からもたらされる。イナンナやイシュタル、アフロディテに共通する神話で有名なのが、死んだ配偶者（あるいは愛人）を探しに地下世界へと下って行き、その後、配偶者が再生するという作物の起源の神話である<sup>50)</sup>。死んでは蘇る配偶者は穀物霊を表わしており、この神話において上記の女神たちは豊穡の女神として作物の繁殖と豊穡を司るといふ役割を担っている。

援助する娘の住処および主人公が後に難題を課される場所は、天界ではなく、大地との結びつきが強い山や森、地下世界などであり、そこは大地母神や子宮を象徴し、豊穡がもたらされ、さらに聖婚の儀式が執り行われる場所であることがわかった。次に上記のような場所で主人公に課される難題の内容およびその解決方法を見ていくこととする。

## 4 課題——王としての資格

### (1) 課題の内容

異界へたどり着いた主人公は異界の王から実現不可能な課題が与えられる。この課題の数は3つであることが多く、さらに主人公は各々の課題を一晩で成し遂げなくてはならない。アールネは課題型の呪的逃走譚における課題の種類を調査したが<sup>51)</sup>、これをもとに頻出度の高い順に課題の内容を並べると次のようになる<sup>52)</sup>。「森林伐採、耕作、種蒔・刈り入れ・パン焼き」(67話)、「似たような姿をした娘たちの中から花嫁を選び出す」(42話)、「野生の馬を手なづける」(32話)、「家畜小屋をきれいにする」(25話)、「湖や池の水を空にする」(20話)、「城の建築」(18話)、「教会の建築」(15話)、「庭作り」(9話)、「高い塔の中にある巣から卵をとってくる」(9話)、「穀物の選り分け」(8話)、「船作り」(5話)、「黒い雲を洗って白くする」(5話)、「海の中の指輪の探索」(4話)、「水を笊で汲む」(4話)。花嫁選びのモチーフは一般的に課題を

成し遂げた後に出てくるため、「課題」+「花嫁選び」<sup>53)</sup>と別個に考えられる。アールネの調査によると「森林伐採、耕作、種蒔き・刈り入れ・パン焼き」という農耕に関するモチーフが最も多く、次いで「野生の馬を手なづける」、「家畜小屋の掃除」という家畜に関するモチーフが続く。「教会の建築」、「庭作り」、「船作り」は「城の建築」の変形であり、一つにまとめることができるだろう。以下、これらのモチーフの起源について確認する。

エーリヒ・ポイカートは、AT 313において主人公に課される難題、すなわち1日で城を建て、1日で森を開墾し、1日で畑を耕すことは耕作を行う栽培民の文化に遡るとしている<sup>54)</sup>。収穫を早めることは明らかに呪術的な能力の証明であり、未来の王となる者はそうした能力があることを期待され、それを証明しなければならなかった。古代の王は同時に呪術師でもあったが、一夜にして宮殿を建て、異常に早い収穫をもたらす主人公のモチーフの起源は通過した加入礼のおかげで収穫を早めることができる呪術師や祭司にまつわる観念に遡るとプロップは述べている<sup>55)</sup>。

「野生の馬を手なづける」、「家畜小屋の掃除」という難題を克服することは、主人公に動物を支配する力があることの証明となる。AT 313の主人公はしばしば馬に乗って逃走するが、周知のごとく、シャーマンも葬送動物および魂の導き手として馬をエクスタシー達成の手段として使用する<sup>56)</sup>。またフランス、イタリア、スペイン、フィリピンの類話では異界から主人公が逃走するために馬が使用されているが<sup>57)</sup>、援助する娘の助言、すなわち呪力なくして馬を手なづけることはできない。また耕作者の一部は家畜所有者でもあるので、「家畜小屋の掃除」が農耕に関する難題と結びついて不思議ではない<sup>58)</sup>。

以上、AT 313の課題において頻出度の高いモチーフについて確認したが、主人公に与えられた課題は実際に王=呪術師あるいはシャーマンに求められた能力と同じであり、このメルヒェンが農耕社会における指導者にまつわる物語であることがうかがえる。

#### (2) 難題を代行する娘と泣き、食べ、眠る主人公

ところで課題を与えられた後の主人公の行動は散々なものである。KHM 113の主人公は森を切り拓くのに、王からガラス製の斧と楔と薪

わりを渡される。しかし、これらの道具が砕けて、どうすることもできないとわかると、主人公は泣いてしまう。そこへ敵対者の娘がやってきて、主人公に食事を与え、主人公が寝ている間に娘の手下である小人が難題を代行する。類話によっては娘が主人公に助言を与え、娘から言われた通りにして主人公自身が難題を成し遂げるものもあるが、いずれにせよ主人公は娘なくして課題を完遂できない。表3は課題遂行時における援助する娘および主人公の行動をまとめたものである。

表3が示している通り、KHM 113の主人公だけでなく、他の類話でも主人公の多くが不可能な課題を前にして泣き出すと娘が現われ、娘から主人公に食事が与えられ、主人公が眠っている間に課題が成し遂げられる。AT 313の多くの類話で確認される「泣く」、「食べる」、「眠る」の行為は何か重要な意味があるように思われる。

タマシ・カルメン氏は論文「感情を越えて」の中で、ルーマニアの儀礼における「泣き」および様々な文化圏の神話における「泣き」の事例を紹介しており<sup>59)</sup>、氏によると「泣くことは神あるいは他界にある祖霊と感応する為の特別な道具であり、ただの言葉がもはや十分でなくなった時に神聖なことにに関して使われる」<sup>60)</sup>という。また、大声で泣き、嘆き悲しむことはアメリカ・インディアンの多くの部族では祈りの行為であり、初期キリスト教や中世の考え方にも祈ることと泣くことが同一視された<sup>61)</sup>。さらに涙は豊穡の儀式とも関係があり、古代オリエントの民族は耕作と種蒔きの際、いつも嘆き、泣いた<sup>62)</sup>。これは豊穡神の死を嘆き悲しみ、泣いて神を春にまた呼び戻す意味がある<sup>63)</sup>。

食物を摂る行為もしばしば豊穡の儀式と関係があり、この行為は種を播くこと、あるいは神への供儀と同一視されるという<sup>64)</sup>。日本でも神に捧げた食物である「神饌」を皆で分け合う「直会」という儀式があるが、これは神と同じものを食べることで神との一体感を持ち、神の力を分かちもつを目的としている。また異教の秘儀では、生贄となって死んだ神を食べることや入信の儀式、定式文句を唱えることで、神による憑依状態を作り出したという<sup>65)</sup>。AT 313の主人公も食べることによって、援助する娘の力を得る、あるいは憑依状態を作ろうとしたと考えられる。

「眠り」の行為は、メルヒェンや伝説、神話ではしばしば忘我の状態を表している。ゲールツはあるインタビューで、竜退治の際に主人公が眠るのは魂の存在として霊的な竜と戦うから、すなわち変性意識（トラ

表3 AT313 における課題遂行時の援助者および主人公の行動

国・地域	援助者の行動	主人公の行動
ドイツ①	①主人公に <u>食事</u> を持っていく、主人公の虱をとってやると主人公は眠る、主人公が眠っている間に小人たち（アルヴェッガー）を呼び出し、課題を完遂させる ②同上 ③同上	<u>泣く</u> ① <u>食後に眠る</u> ②同上 ③同上
ドイツ②	① <u>食事</u> を持っていき、主人公が眠っている間に願いの叶う指輪を用いて課題を代行 ②同上 ③同上 ④丸太の姿で火の中にくべられている	① <u>眠る</u> ②同上 ③同上 ④炎を恐れず、火の中へ飛び込み、丸太を取り出す
ドイツ③	① <u>食事</u> を持っていき、主人公が眠っている間に課題を代行 ②同上 ③同上	① <u>食後に眠る</u> ②同上 ③同上
ドイツ④	① <u>食事</u> を持っていき、魔法の力で課題を代行 ②同上 ③同上	<u>泣く</u> ①何もしない ②同上 ③同上
ドイツ⑤	①助言を与える ② <u>食事</u> を持っていき、助言を与える ③助言を与える ④同上 ⑤同上	援助者の助言通り、 ①鎌を撫でる ②斧を石で撫で、斧をひっくり返して木に打ち込む ③干し草をひと固まり首筋に載せる ④木を首筋に載せる ⑤粘土のレンガを撫で、乾いたら首筋にひと固まり載せて家へ運ぶ
オーストリア	① <u>食事</u> を持っていき、主人公が食事をしている間に課題を代行 ②同上	<u>泣く</u> ① <u>食事をしている</u> ②同上
スウェーデン	①小人たち（Däumling）を呼びだして課題を完遂させる ②同上 ③同上 ④助言を与える ⑤同上	<u>泣く</u> ①何もしない ②同上 ③同上 ④助言通り、耳のかけた猫（娘）を選ぶ ⑤助言通りに行動する（叔母のところへ行く前に海の精の宝をとってくる、門に角からできた軟膏を塗る、途中で会う男たちに鉄の斧を渡す、二匹の鷲に肉をやる、叔母のところでも何も食べない）

フランス	<p>①食事を持っていく、助言を与える</p> <p>②同上</p> <p>③同上</p> <p>④助言を与える</p>	<p>食後、助言通り、</p> <p>①小さな杖で三度山を叩き、その後、<u>眠る</u> (目を覚ましてはいけない)</p> <p>②援助者が持ってきた鉢を使い、<u>眠る</u> (目を覚ましてはいけない)</p> <p>③援助者を煮て骨を取り出し、肉をはがす、骨を一本筋緑の山に差し込み梯子代わりにする、降りる時には骨を全部拾い集めて鍋に入れて煮て援助者を元通りにする、左手の小指の爪を置いてきてしまう</p> <p>④左手の小指の爪が欠損している花嫁(援助者)を選ぶ</p>
イタリア①	<p>①課題を代行</p> <p>②同上</p> <p>③同上</p>	<p><u>泣く</u></p> <p>①何もしない</p> <p>②同上</p> <p>③同上</p>
イタリア②	<p>①主人公が眠っている間に課題を代行</p> <p>②助言を与える</p> <p>③魔法の杖と助言を与える</p> <p>④×</p>	<p>①<u>眠っている</u></p> <p>②助言通り、援助者の頭を刎ねる(その際、血を一滴も大地にこぼしてはいけないのだが、三滴湖の中にこぼしてしまう)</p> <p>③助言通り、沢山結び目のついた杖で馬の背中を叩く</p> <p>④×</p>
イタリア③	<p>①魔法の言葉を教える</p>	<p>①助言通り、魔法の言葉を述べる</p>
スペイン①	<p>①主人公が眠っている間に課題を代行</p> <p>②同上</p> <p>③同上</p> <p>④助言を与える</p> <p>⑤同上</p> <p>⑥同上</p>	<p>①<u>食後に眠る</u></p> <p>②同上</p> <p>③同上</p> <p>④助言通り、援助者を細かく切り刻み、一滴の血もこぼさずに瓶の中に入れる、蓋をして川へ瓶を投げ入れる(しかし小指の血を一滴こぼす)</p> <p>⑤馬の右側を叩かず、頭を叩く</p> <p>⑥指の先が欠けた援助者の手を選ぶ</p>
スペイン②	<p>①課題を代行</p> <p>②同上</p> <p>③助言を与える</p> <p>④同上</p> <p>⑤同上</p>	<p>①何もしない</p> <p>②何もしない</p> <p>③助言に従って、血を一滴も流さないで援助者を切り刻み、援助者が海に入っている間にギターを鳴らし続ける(その間、主人公は寝てはいけないが、眠ってしまい、さらに援助者の小指から血が一滴流れ小指が欠ける)</p> <p>④援助者が変身している以外の場所を叩く</p> <p>⑤小指の欠損が印となり、花嫁(援助者)を選ぶ</p>
スペイン③	<p>①主人公が眠っている間に課題を代行</p> <p>②助言を与える</p>	<p>①<u>眠っている</u></p> <p>②援助者を切り刻み、一滴も血をこぼさず瓶の中に血を入れて海の中へ投げるが、血をこぼしてしまい中指が欠ける</p>

スペイン④	①小さい悪魔が詰まっている箱を開けて、悪魔たちに課題をやらせる ②同上 ③助言を与える	①何もしない ②同上 ③血を一滴もこぼさずに援助者を切り刻み、援助者が海に入っている間、アコーデオンを鳴らし続ける（眠ると死んでしまう）
アイルランド	①課題を代行 ②同上 ③助言を与える	食事を与える、泣く ①何もしない ②何もしない ③助言通り、西の戸口に火ばさみ、東の戸口に自在鉤、部屋の真ん中にブラシを立てて三つの話を同時に語るように言いつける
ハンガリー	①助言を与える ②同上 ③課題を代行	①助言通り、援助者の両手、頬にキスをする ②同上 ③?（言及されていない）
チェコ・スロヴァキア	①助言を与える（主人公が眠っている間に娘の手下が課題を完遂）	①助言通り、20本目の木に斧を入れ、10本目の木をのこぎりで引き、眠る
ルーマニア	①悪魔の主人（娘の父親）の魔法の鞭を使って地獄の霊たちを呼び出し、課題を完遂させる ②同上 ③同上（しかし失敗して逃走する）	泣く ①眠っている ②同上 ③同上（娘と逃げる）
ロシア①	①助言を与える ②課題を代行	①助言通り、左の耳に蚊が止まっている娘（援助者）を選ぶ ②眠っている
ロシア②	①鳩になってのこぎりを出す、するとこのこぎりがひとりで木を切り出す ②鳩の姿になって主人公と一緒に一つの切り株を引き抜く ③助言を与える	①何もしない ②タバコの吸引、鳩と一緒に一つの切り株を引き抜く、全ての切り株が引き抜かれ、それを運ぶと切り株はひとりで積み重なる ③タバコの吸引、援助者の助言通りに小麦と善を播く
ロシア③	①馬丁が助言する ②娘が助言を与える ③同上 ④何もしない	①馬丁の言う通り、周りを蠅が飛んでいる馬を指し、魔法使いの好きな馬を当てる ②娘の助言通り、大きく手を振って薪を割る、薪を数本ポケットにしまっておく ③娘の助言通り、馬が高く飛び上がった時に薪を出して耳と耳の間を叩く ④蠅に気づいて花嫁を選ぶ

ロシア④	①魔法の力で大工や職人たちに課題を完遂させる ②魔法の力で庭師と園丁に課題を完遂させる ③一度目はハンカチを振り、二度目は衣装を直し、三度目は頭の上に蠅を飛ばせて王子に合図を送る ④大食い仲間（王子の援助者）が課題を代行 ⑤大酒飲み仲間（王子の援助者）が課題を代行 ⑥寒の太郎（王子の援助者）が課題を代行	<u>泣く</u> ①眠っている ②同上 ③助言通り、援助者の合図を見て花嫁（援助者）を選ぶ ④何もしない ⑤同上 ⑥同上
シベリア	①魔法の指輪で1000人の精霊たちを呼び出し、主人公の代わりに課題を完遂させる	①眠っている
トルコ	①助言を与える ②同上	①助言通り、「すでに知っているのか？」という質問に「知らない」と答える ②援助者からもらった鳥を放ち、その鳥が飛んでいく先にいる花嫁（援助者）を選ぶ
フィリピン	①課題を代行 ②同上 ③助言を与える	①何もしない ②同上 ③助言通り、一片たりとも落とさずに刀で援助者を切り刻み、海に投げ込む（1回目と2回目は寝てしまい失敗、3回目に成功）、3回目には若者も指に切り傷をつけられる
サモア	①課題を代行 ②何もしない ③助言を与え、切られた援助者は魚の姿になって指輪をとってくる	<u>泣く</u> ①何もしない ②犬との戦いに勝つ ③援助者に言われた通り、援助者を二つに切って海に投げ入れる、援助者が海の中で探している間に眠ってしまう
アルゼンチン	主人公に飲食物を与える ①課題を代行 ②同上 ③助言を与える ④同上	<u>泣く</u> <u>援助者がくれたもの飲み食いする</u> ①何もしない ②同上 ③助言通り、荷車を代えながら薪を運ぶ ④助言通り、ブランカ・フロール（娘）というのは聞いたことがないと答える

ンスの状態）で竜と戦っているからだとして述べており<sup>66)</sup>、さらに AT 313 の主人公が娘の援助を受ける前の眠りもシャーマンのトランスだと考えている<sup>67)</sup>。援助する娘が難題を代行するのは、主人公が眠りについた後である。つまり主人公が眠っている間、援助する娘が主人公に憑依しおり、課題を成し遂げていると考えることができる。

以上、AT 313 の課題を課された主人公の「泣く」、「食べる」、「眠る」



という一連の行為を民族学的な側面から解釈すると、これらの行為は「援助する娘＝女神を呼び出し」、「女神と一体となり」、「憑依状態で難題を完遂する」という儀礼的行為あるいはシャマニズム的行為となる。

ところでエリアーデは、天界の花嫁を妻としたゴルディ人のシャーマンに関するレフ・シュテルンベルクの報告を引用しているのだが、このシャーマンの儀式がAT313の主人公の行動と類似している事例であるため以下に紹介する。

### (3) AT 313の主人公と類似するシャーマンの事例

あるゴルディ人シャーマンの自伝によると、病床上で眠っていた時に一つの精霊（アヤミ ayami）が近づいてきて、自分を妻にするよう命じる。この天界の花嫁アヤミは夫を教育し、補助する。夫がシャーマンの技を行っている時に、アヤミとアヤミに服従する補助霊（syvén）がこの夫に憑き、夫の口を通してアヤミは話し、何事もアヤミ自身で行う<sup>68</sup>。またヤクト人のシャーマンも固有の守護霊エメゲット（死んだシャーマンの魂あるいは天上の霊）を通してのみ物を見たり聞いたりする、すなわちここでも守護霊の憑依が確認される<sup>69</sup>。

ゴルディ人の事例では技を行っている時に守護霊アヤミと補助霊がシャーマンに憑依しているが、AT 313のメルヒェンの主人公もまた眠っている時に援助する娘とその手下である小人や精霊が難題を代行する。さらにある類話では難題を成し遂げる前に主人公がタバコを吸い<sup>70</sup>、また別の類話では、娘が代わりに課題を成し遂げている間、目を覚ましてはいけない、援助してもらったことを他言してはいけないという禁忌が主人公に課されている<sup>71</sup>。これらはシャーマンがトランス時に行うタバコの煙の吸入や加入礼の際、獲得した援助者や呪法、護符について秘密にしなければならないことを想起させる。「目を覚ましてはいけない」のはトランス時にシャーマンの技が行われているからであろう。

一般的にシャーマンがトランス状態になって精霊と接触・交流する仕方は大別して脱魂型と憑依型の2通りがあるのだが、脱魂型のシャマニズムは狩猟採集民の間に発達しており、憑依型は牧畜農耕民族の間に広く分布しているという<sup>72</sup>。AT 313には大地母神や古代の王に課された呪術的課題など農耕儀礼を示唆する事柄が散見されるが、憑依型のシャーマンのトランスとその技が反映していると考えられる泣き、眠り、

援助する娘と小人や精霊による難題の解決方法もまた牧畜農耕民族と密接につながっている儀礼だと考えられる。

#### (4) 小人 Arweggers とアフロディテの従者エロス

さて KHM 113 では援助する娘が大地を叩くとアルヴェッガー Arwegger という名の小人たちがやってきて課題を完遂するのだが、グリムは原註で Arwegger という名称について、『エッダ』に現れている小人の名前アウルヴァングル Aurvangr という語およびアングロサクソン語の earwigga を語源とする Ohrwürmchen 「耳のような形をした虫」という小人の名称との関連性を指摘している<sup>73)</sup>。KHM 113 以外にも娘の手下が難題を解決する類話がある<sup>74)</sup>。

アフロディテもまたエロスを従えているが、ベルリン博物館所蔵のヒエロン作のキュリックスの赤絵では左手に鳩を抱いているアフロディテの周りを有翼の複数のエロスたちが植物の枝を手を持ち、アフロディテに贈り物をもたらしており、女神に付き従う息子というよりは精霊といった印象を抱かせる。メガラのテオグニス<sup>75)</sup> はエロスについて精霊を連想させるような次の詩を残している。

「エロスもまた季節のもの、大地がふくらみ春の草花が咲きほこる時のもの。そのときエロスはキュプロスの、こよなく美しいあの

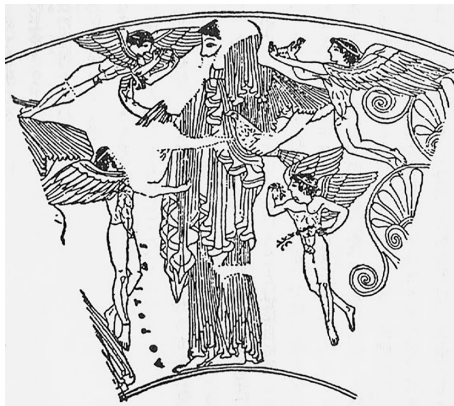


図 ベルリン博物館所蔵のキュリックスの赤絵：アフロディテとエロス<sup>77)</sup>

鳥を後にして、人びとのもと大地の面に種をもってやってくる。』<sup>76)</sup>

テオグニスの詩は、主人公の代わりに耕作を行う AT 313 の小人と同様、大地に種を播き、耕作を行うエロスの姿を想起させる。アフロディテだけでなく、しばしば大地母神にはキュレテスやテルキネス（ロドス島の精）、コリューブス（大地母神キュベレーの従者たち）、サテュロス（半人半獣の山野の精）といった精霊が付き従っているが、小人あるいは精霊を従えるという点でも AT 313 の援助する娘と大地母神は共通している。

## 5 聖婚の儀式

王または聖王と女神との結婚は聖婚（ヒエロス・ガモス / hieros gamos）と呼ばれるが、王位継承の条件としてこの聖婚は不可欠と考えられていた。聖婚の祭儀は一般的には春に行われ、この祭儀で神と交信し、王自身が神の属性を帯び、女神を体現している女王（あるいは女司祭）と結婚することで土地、民、国の利益のために豊穡がもたらされるよう祈念した<sup>78)</sup>。王を指すラテン語 rex あるいは reg は、ケルト語の rig と同じく、サンスクリット語の raj に由来しており、言語だけでなく、王位に関する観念もユーラシア大陸全体に広まっていき、どの国の王もその国の大地を体現している女性たちの承認がなければ統治権を得られなかった<sup>79)</sup>。歴史的に有名な聖婚の例として、アフロディテと同系の女神イナンナを体現している女祭司とシュメール王との間で行われた聖婚が挙げられる。

領土の肥沃さは女王が性的な意味で王を受け入れられることにかかっていたため、女神（女王）による王の選出は、主として、候補者たちの性的魅力を基準にして行われていた<sup>80)</sup>。バーバラ・ウォーカーによると、王選出の通常の方法は、「毎年魔法の力で女神が処女性を回復する水浴の儀式的折に、王となる男性に女神の裸体を眺めさせ、彼の男としての生殖能力を吟味すること」<sup>81)</sup>であった。この選出方法は、異類の娘たちのうち一人の羽衣を主人公が盗み、娘が帰れなくなったところで主人公が現れる、すなわち裸体で娘が主人公と相対し、後に夫婦となる AT313 の導入部の一つ「白鳥の乙女」のモチーフと筋の点で一致する。ただ

し、歴史的には女神を体現している女王あるいは巫女が王を選んでおり、母権的社会を反映しているが、メルヒェンでは主人公が異類の娘の羽衣を奪うことで、娘を自分のものにするという男性優位のモチーフに変わっている。また、ギリシア神話では、女神の裸体を見たアクタイオンは死に、テイレシアスは盲目にされているが、その背景には女神の恐ろしい一面が表れている。

AT313の主人公がいつも男であり、援助する者が娘である理由は、まさにAT 313のメルヒェンが、大地を体現している女性（=女神）と女神からその力を与る王の聖婚という歴史的事実に由来するためと考えるをえない。

## 6 まとめ

本稿ではAT 313「主人公を援助する娘」の課題型タイプのメルヒェンを民族学的アプローチによりその起源を解明しようと試みた。主人公を援助する娘が鳩や鴨、魚、山羊、猫などアフロディテなど豊穡の女神の表徴である動物に変身し、その住処が山、森、地下界など豊穡がもたらされる大地を軸とした場所であること、アフロディテがエロスを従えているのと同様、AT 313の援助する娘も時折、小人などを手下に従えていること、主人公に課された耕作などに関する難題を代行する、すなわち豊穡をもたらす能力を授けていることから援助する娘の起源は上記の豊穡の女神に遡ると考えられる。また主人公にしばしば課される城の建築、森林伐採、耕作などをそれぞれ一日で成し遂げるといふ課題は、実際に古代の王に求められた能力であり、これらの課題は農耕文化に由来する。難題を解決する際、主人公は泣き、食べ、眠るがこれらの行為は豊穡の女神を呼び出し、女神と一体となり、女神あるいはその精霊に憑依されることで呪術的に難題を解決するシャーマンの技に類似していることがわかった。本稿では、紙面の都合上、AT 313のメルヒェンとアルゴ船伝説、オオナムチの冥界訪問などの神話との比較および「呪的逃走」と「忘れられた花嫁」の両モチーフと歴史的な聖婚との関係に触れることができなかった。AT 313のメルヒェンと上記の神話との関係性および「呪的逃走」と「忘れられた花嫁」のモチーフが聖婚の儀礼との間にいかなる関係があるのかという問題は今後の課題としたい。

注

- 1) Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand. Mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm, Band 2, Reclam, Stuttgart 2003, S.137-145.
- 2) Thompson, Stith: The Types of the Folktale. A Classification and Bibliography. Antti Aarne's Verzeichnis der Märchentypen (FFC No. 3) translated and enlarged, Second Revision, FFC Nr. 184, Helsinki 1987 (1961), p. 104-108.
- 3) Ebd., p. 106. およびハンス・イエルク・ウター『国際昔話話型カタログ アンティ・アールネとステイス・トムソンのシステムに基づく分類と文献目録』加藤耕義訳、小澤俊夫日本語版監修、原書第二版（2011年）、小澤昔ばなし研究所、2016年、165-166頁。なお、ATをもとにウターによって増補された国際昔話話型カタログはATUと略記されているが、ATU 313の表題は「呪的逃走」に変更されている。
- 4) Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand. Mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm, Band 3, Reclam, Stuttgart 2014 S. 505.
- 5) Aarne, Antti: Die magische Flucht. Eine Märchenstudie. FFC 92. Helsinki, 1930. アールネは背後に呪物を投げて森や山、川などを生じさせ、追跡者から逃れる「障害型」と敵対者の娘の援助を得て主人公たちが変身して追跡者から逃れる「変身型」に分類し、呪的逃走譚の最も古い型は「障害型」であり、「障害型」から「変身型」が派生したと結論し、「障害型」の発生地域をアジアと推定している。
- 6) ウラジーミル・プロップ『魔法昔話の起源』、斎藤君子訳、せりか書房、1993（1983）年、356頁。
- 7) 同上、362頁。
- 8) Klaus Antoni: Japanische Totenwelt und Magische Flucht: Eine kulturvergleichende Betrachtung. In: Werden und Vergehen. Betrachtung zu Geburt und Tod in japanischen Religionen. Hrsg. V. Brigit Staemmler. Berlin 2016, S. 78.
- 9) Marie Pancritius: Die magische Flucht, ein Nachhall uralter Jenseitsvorstellungen. In: Anthropos, Bd. 8, H. 4/5. (Jul-Oct.,1913) S. 854-879. Marie Pancritius: Die magische Flucht, ein Nachhall uralter Jenseitsvorstellungen (schluss). In: Anthropos, Bd. 8, H. 6. (Nov.-Dec.,1913) S. 929-943.
- 10) 高木昌史「三枚の御札／水の魔女」『成城文藝』第224号、2013年9月（初出）。この論文は以下の文献に収録されている。高木昌史『グリム童話と日本昔話 比較民話の世界』三弥井書店、2015年、73-110頁。

- 11) Lang, Andrew: Custom and Myth. New York 1968 (1884), p. 87-102.
- 12) アールネは「主人公を援助する娘」の物語を AT 313 に分類しているように、メルヒェンの一つの型（タイプ）と認識しているが、カール・モイリは AT 313 「主人公を援助する娘」のメルヒェンを「モティーフ」と述べている。
- 13) Meuli, Karl: Odyssee und Argonautika. Untersuchungen zur griechischen Sagensgeschichte und zum Epos. Berlin 1921, S. 2-5.
- 14) Liljeblad, Sven: Argonauterna och sagorna om flykten från trollet. Saga och sed, Uppsala 1935, S.29-48. リリエブラッドのこの論文は以下のヤン・デ・フリースの論文の中で詳しく紹介されている。
- 15) de Vries, Jan: Betrachtungen zum Märchen, besonders in seinem Verhältnis zu Heldensage und Mythos. FFC Nr. 150, Helsinki 1954. 特に S. 84-98. なお、この論考でヤン・デ・フリースはアルゴ船物語を「アルゴ船伝説」と呼んでおり、この物語が神話、伝説のどちらのジャンルに分類されるか重要な問題ではあるが、紙面の都合上、本稿ではジャンル論については特に触れないことにする。
- 16) Heino Gehrts: Zur Alterbestimmung zweier Märchentypen. AT 303 und 313. Hrsg. Heiko Fritz: Aspekte der Märchenforschung. Schriften zur Märchen-, Mythen- und Sagenforschung. Band 1, Gesammelte Aufsätze 1. Hamburg 2014, S. 81-98, hier S. 87-98.
- 17) Ebd., S. 97.
- 18) Thompson 1987, p. 104.
- 19) 「禁じられた箱」のエピソードは以下の通り。鶯（鶯の妹、鶯の父）が男に家に着くまでは開けないようにと箱をくれるが、男が言われたことを守らずに開けると城が現れる。箱を閉じるために人食い鬼の援助を受けねばならず、まだ生まれていない息子を与える約束をする。
- 20) Aarne 1930, S. 108-109.
- 21) Ebd.
- 22) 冒頭、七羽の「白鳥」と記されているが、以後、全て「鳩」となっている。
- 23) この話の導入部は「白鳥の乙女」ではないが、娘を忘れた王子の記憶を呼び起こす際、白い鳩がやってきて、王子は娘のことを思い出す。この白い鳩は援助する娘自身が変身した姿であるように思われる。
- 24) Enzyklopädie des Märchens, Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung. Hrsg. Rolf Wilhelm Brednich, Band 12, Berlin / New York 2007, S. 312. 以下、EM と略記する。
- 25) ノーマン・モズリー・ペンザー Norman Mosley Penser の白鳥の乙女の物語をインド起源とするテーゼは、トーテム起源説をとるヴィクトル・

- ジルムンスキー Viktor Zirmunskij やエレアザール・メレチンスキー Eleazar Meletinskij などによって反論された。Ebd., S. 314-315.
- 26) Ebd., S. 314.
  - 27) アン・ベアリング他『図説世界女神大全 I』森雅子訳、原書房、2007年、2頁。
  - 28) 同上、147頁。
  - 29) バーバラ・ウォーカー『神話・伝承事典』山下主一郎他訳、大修館書店、1988年、209頁。
  - 30) J.J. バッハオーフェン『母権論2 古代世界の女性支配に関する研究—その宗教的および法的本質』岡道男、河上倫逸監訳、みすず書房、1993年、272 (623) 頁。
  - 31) バーバラ・ウォーカー、前掲書、209頁。
  - 32) Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens, Hrsg. Hans Bächtold-Stäubli, Bd. 2, Berlin 1987, S.850. 以下、HdA と略記。
  - 33) Wörterbuch der Symbolik, Hrsg. Manfred Lurker, 5. Aufl. Stuttgart 1991, S. 175.
  - 34) von Bonin, Felix: Wörterbuch der Märchen Symbolik, Ahlerstedt 2009, S. 78.
  - 35) EM, Bd. 4, Hrsg. Kurt Ranke, 1984, S. 2.
  - 36) ミルチア・エリアーデ『シャーマニズム (上)』堀一郎訳、筑摩書房、2010年、263頁。
  - 37) 同上、350-351頁。
  - 38) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎他訳、大修館書店、1984年、245頁。オウイデイウス『変身物語』(5・311)で、アフロディテ(ヴィーナス)はテュポエウスから逃げる際、魚に変身している。Ovid: Metamorphosen, Übersetzt und hrsg. Michael von Albrecht, Stuttgart 2010, S. 263.
  - 39) アト・ド・フリース、前掲書、246頁。
  - 40) アン・ベアリング他、前掲書、74-75頁。
  - 41) J.C. クーパー『世界シンボル辞典』岩崎宗治他訳、三省堂、1992年、114頁。
  - 42) アン・ベアリング他『図説世界女神大全 II』森雅子訳、原書房、2007年、12-13頁。
  - 43) バッハオーフェン『母権論1』岡道男、河上倫逸監訳、みすず書房、1996年、144 (160) 頁。
  - 44) Die Götterlieder der Älteren Edda, Übersetzt, kommentiert und hrsg. Arnulf Krause, Stuttgart 2006, S. 205. (「ヒュンドラの歌」47)
  - 45) Ebd., S. 159. (「スリュムの歌」3)

- 46) バーバラ・ウォーカー、前掲書、128 頁。
- 47) アン・ベアリング他、前掲書 (『図説世界女神大全 I』)、299-300 頁。  
バーバラ・ウォーカー、前掲書、560 頁。
- 48) バーバラ・ウォーカー、前掲書、284 頁。
- 49) 同上。
- 50) 詳しくは J・G・フレイザー『金枝篇〈第 5 巻〉アドニス・アッティス・オシリス』神成利男訳、国書刊行会、2009 年を参照。
- 51) Aarne 1930, S. 106-108.
- 52) アールネはフィンランドとエストニアの類話数が多いため、両地域に関しては詳細な数を挙げていない。フィンランドとエストニアを除くと総数は 263 になる。
- 53) ルツ・レーリヒ Lutz Röhrich は「花嫁選び」のモチーフは婚姻の習俗に遡るとし、花嫁が誰だかわからないようにすることで、超自然の悪の力から新郎新婦すなわち通過儀礼の際、危険にさらされている者たちを守るという習俗の例を紹介している。Röhrich, Lutz: Märchen und Wirklichkeit. 3. Auflage, Wiesbaden 1974, S. 111-112.
- 54) EM, Bd. 1, Hrsg. Kurt Ranke, Berlin 1977, S. 966-967.
- 55) ウラジーミル・ブロップ、前掲書、322-325 頁。
- 56) シャマニズムと馬については以下を参照: ミルチア・エリアーデ『シャーマニズム (下)』堀一郎訳、筑摩書房、2010 年、283-286 頁。
- 57) フランス、イタリア②、スペイン①、②、フィリピンの類話。
- 58) Röhrich 1974, S.107.
- 59) タマシ・カルメン「感情を越えて——ルーマニアの儀礼における泣くこと——」『説話・伝承学会』第 18 号、2010 年 3 月、170-188 頁。ここでは主にオシリス、アドニス、タンムズなどの豊穡神が死に、イシスやイシュタル、アフロディテなどの女神が泣くことで豊穡神が復活する神話を紹介している。AT 313 の「泣き」は復活のための慟哭ではなく、援助する娘 = 女神と感応するための泣きだと考えられる。
- 60) 同上、171 頁。
- 61) HdA, Bd. 10. 2000, S. 329.
- 62) Ebd., S. 329.
- 63) アト・ド・フリース、前掲書、627、682 頁。デメテルやフレイアなどの涙である「神々の涙」とは雨のことで、イシスの涙は豊穡のナイルを表す。また愛と豊穡の女神フレイヤは黄金の涙を流しながら夫を探す (Vgl. EM, Band 13, S. 858)。
- 64) アト・ド・フリース、前掲書、201 頁。
- 65) バーバラ・ウォーカー、前掲書、640 頁。
- 66) Heino Gehrts: Wenn es zu Wundern und Verzauberung hinzieht .... Hrsg.



- Heiko Fritz: Aspekte der Märchenforschung. Schriften zur Märchen-, Mythen- und Sagenforschung. Band 1, Gesammelte Aufsätze 1. Hamburg 2014, S. 52-53.
- 67) Heino Gehrts: Zaubermärchen und Schamanentum. Hrsg. Heiko Fritz: Aspekte der Märchenforschung. Schriften zur Märchen-, Mythen- und Sagenforschung. Band 1, Gesammelte Aufsätze 1. Hamburg 2014, S. 76-77.
- 68) エリアーデ、前掲書(上)、144-146頁。
- 69) 同上、167-168頁。
- 70) ロシア②の類話。
- 71) スウェーデン、イタリア②、スペイン①、④、ロシア②、トルコ、アルゼンチンの類話。
- 72) 福田アジオ編『日本民俗大辞典(上)』吉川弘文館、1999年、798頁。
- 73) Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen, Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm, Band 3. Stuttgart 2003, S.196 [S. 207]。『ドイツ神話学』ではヴェストファーレンの古い方言では arwegget は arbeit の意味であり、すなわち arweggers は arbeiter 「労働者」を意味しているのかもしれない、とヤーコブは別の見解も示している。Jacob Grimm: Deutsche Mythologie. Bd. II. Wiesbaden 2003 (1875-78), S. 130.
- 74) スウェーデン、スペイン④、ルーマニア、シベリアの類話。
- 75) 紀元前6世紀頃のメガラ出身の詩人。
- 76) メガラのテオグニス『世界人生論全集1』久保正彰訳、筑摩書房、38頁(『エレゲイア詩集』1275行)。
- 77) 図はジェーン・E・ハリソン『ギリシアの神々』船木裕訳、筑摩書房、1994年、159頁より。
- 78) 「聖婚」についてはバーバラ・ウォーカー、前掲書、408-414頁(「王位、王権」)を参照。
- 79) 同上、413頁。
- 80) 同上、408頁。
- 81) 同上、411頁。

#### AT 313 (課題型) の文献一覧

- ドイツ① KHM 113 「王様の二人の子ども」: Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen, Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen, Bd. 2, Stuttgart 2003, S. 137-145.
- ドイツ② KHM 193 「太鼓叩き」: Ebd., S. 397-408.
- ドイツ③ 「七羽の鳩」: 小澤俊夫編『世界の民話 ドイツ・スイス』ぎょうせい、1976年、26-32頁。
- ドイツ④ 「ヨハネス王子」: Wilhelm Busch; Ut öler Welt. München 1910, S. 52-

- ドイツ⑤「ゴールドマリケンとゴールドフェーダー」: Karl Müllenhoff: Sagen, Märchen und Lieder der Herzogthümer Schleswig, Holstein und Lauenburg. Kiel 1845, S. 414-422.
- オーストリア「地下世界へ行った若い伯爵」: Richard Beitl: Im Sagenwald, Neue Sagen aus Vorarlberg, 1953, Nr. 600, S. 326-331.
- スウェーデン「王様の子どもとメッセリア」: Hyltén-Cavallius, Gunnar/Stephens, George: Schwedische Volkssagen und Märchen. Wien: Haas, 1848, S. 255-274.
- フランス「緑の山」: 新倉朗子編訳『フランス民話集』、岩波書店、1993年、52-63頁。
- アイルランド「赤いひげのジラムジ」: 渡辺洋子・岩倉千春編訳『アイルランド民話の旅』三弥井書店、2005年、226-257頁。
- イタリア①(バジレー 2-7「鳩」): ジャンパティスタ・バジレー『ペンタメローネ(上)』杉山洋子他訳、筑摩書房、2005年、267-286頁。
- イタリア②「三羽の鳩」: Märchen und Sagen aus Wälschtirol, Ein Beitrag zur deutschen Sagenkunde, gesammelt von Christian Schneller, Innsbruck 1867, Nr. 27, S. 71.
- イタリア③「Autumunti und Paccareddaの話」: Gonzenbach, Laura: Sicilianische Märchen, Leipzig: Engelmann 1870, S. CCCXLIV344-CCCL350.
- スペイン①「白花姫の物語」: コルテス・イ・バスケス編『スペインの昔話』三原幸久訳、三弥井書店、1975年、133-155頁。
- スペイン②「行きて帰らざる城の物語」: 同上、155-166頁。
- スペイン③「白花姫」: 同上、167-174頁。
- スペイン④「白花姫」: 同上、175-180頁。
- ハンガリー「ローザとヴィオラ」: Elisabet Róna-Sklarek: Ungarische Volksmärchen, Leipzig 1909, S. 152-160.
- チェコ/スロヴァキア「アダメクとシロちゃん」: 小澤俊夫編『世界の民話 東欧〔II〕』小川超訳、ぎょうせい、1977年、3-14頁。
- ルーマニア「王様の息子と悪魔の娘」: Josef Haltrich: Deutsche Volksmärchen aus dem Sachsenlande in Siebenbürgen. Wien 1882, S. 26-27.
- ロシア①「かもの少女」: 小澤俊夫編『世界の民話 東欧〔II〕』小川超訳、ぎょうせい、1977年、207-213頁。
- ロシア②「魔法使い」: 『ロシアの昔話』田中泰子訳、三弥井書店、1976年、162-184頁。
- ロシア③「職探しの兵士」: 同上、185-190頁。
- ロシア④「竜王と賢女ワシリーサ」: アファナーシエフ『ロシア民話集(下)』中村喜和編訳、岩波書店、2004、136-153頁。
- シベリア「追われ者じいさん」: 小澤俊夫編『世界の民話 モンゴル他』小澤俊

- 夫訳、ぎょうせい、1978年、325-332頁。
- トルコ「魔法使いデルヴィッシュ」：Ignaz Kúnos: Türkische Volksmärchen aus Stambul, Leiden 1905, S. 75-81.
- フィリピン「三人の兄弟」：ディーン S. ファンスラー『フィリピンの民話』サミュエル淑子訳、大日本絵画、1979年、98-113頁。
- サモア：<https://gutenberg.org/files/14224/14224-h/14224-h.htm#i2HCH0005>  
Chapter VII 要約 (2022.09.06)
- アルゼンチン「ブランカ・フロール」：『アルゼンチンの昔話』伊藤太吾他編訳、三弥井書店、1978年、57-68頁。